名詞の意味の記述法について

林　四郎

語の意味と、そのあらわれ

語の意味に原義と転義を区別するのがふつうである。原義は最も内奥、中核にある意味として、ただ一つあり、転義は移り行く末端の意味として、いくつもあるものと考えられる。だから、語に原義と転義を考えることは、語を内から外へという方向で構造的にとらえることである。そうして、その方向は、同時に時間的にたどられる。原義と転義を区別する立場は、通時的な立場である。

これに対して、語の意味を共時的な立場から、構造としてとらえることもできる。同じく共時的といっても、その立場はいろいろに設定することができる。例えば、よく使われる意味と滅多に使われない意味とを区別するという立場で構造化を試みることもできる。その立場は単なる量的関心に従った立場のようだが、「よく使われる」ということの中に「どういう方面で」という情報を加味すれば、十分質的な厚みをもつ構造化が考えられる。国立国語研究所が行なっている大規模な語彙調査は、このような、語の意味の構造的記述に役立たなければならない。

また、心理学者が試みるセマンティック・ディファレンシャルの方法は、ある社会集団の中に成立していると思われる意味を、できるだけ一般的な要素に分解してとらえようとするものである。

ここで私が試みるのは、一種の論理的構造の探求である。語の意味に、本質的な部分と現象的な部分とがあると考える。私は仏教のことをよく知らないが、仏様に権現というのがある。本尊は測り知るべからざる深く大きい、そして平穏な存在である仏が、凡夫にも、すぐそれとわかる権威の姿で現われたものが権現であると、私は理解している。この、本尊と権現との関係に、私は大変興味をもつ。ことばの意味にも、本尊的な面と権現的な面とがあると思う。私たちがふだん何気なくことばを使うとき、そのつど、文脈の中でことばの意味は権現している。そして、あらためて「この語の意味は?」と考えるとき、私たちは本尊の意味に直面するのだが、いざ直面すると、何事のおわしますかは知らぬ幽玄な存在に見えてきて、たいてい、わけがわからなくなる。わからなくても、意味の本尊は、たしかにあるはずである。

語の意味を記述するとき、直ちにその語の本質的意味に迫ろうと

するのは性急である。そこで、本質的であろうが現象的であろうが区別なく、あるだけの意味はみな並べて書くということもありうる。現に多くの辞書がそのようにしているし、本質的か現象的かの判定に主観をさしはさむよりは、並べただけの方が科学的であるかもしれない。しかし、私は、そこをできるだけ区別してみたい。

実例で考えよう。経費が予算のわくをオーバーしたときに「足が出た」という。こういう「足」の意味を、辞書がどう書いているか、手元にある二、三の辞書を見る。

三省堂国語辞典には「㊀〔脚〕からだ全体をささえたり、それを使ってからだを進ませたりする部分。」を先頭に、十四項目の意味が列記してある十番目に

㉔不足。「―が出る」

としるしてある。

広辞苑には、「①動物の下肢。立ちまたは歩行の用をなすもの。」以下十六項目の解説があり、十五番目に

⑮〔経〕売買取引上の不足金または相場の変動の跡。

とあり、語義とは別になっている成句解説の中に

―が出る　①予算が超過する。不足する。相場などで損が出る。②隠したことがあらわれる。

―を出す　①予算または収入以上使って足りなくする。②隠しごとをしくじる。

という記述がある。

岩波国語辞典を見ると、全体で五項目しかあがっていないが、ある項目のもとには、くわしい下位区分がある。例えば「③歩くこと。またそのように動くこと」の中が「㋑あゆみ」「㋺訪れるために行く（来る）こと」「㋩足どり」の三つに分れている。そして、問題の部分は第一項目の中に含まれて、

①動物の胴から下に分かれ出ている部分。からだをささえ、また歩くのに使う。特に、人間の足首から下。「―の裏」「―を洗う」「―を奪われる」（スト・事故などで交通機関が止まる）「―を出す」（払うべき金銭が不足する。損をする。また、隠し事があらわれる）「―が出る」（同上）

のように位置づけられている。

私はここで辞書の批評をするつもりはない。批評をするのなら、たくさんの辞書の多くの項目を比べなければいけない。ここでは、たまたま目に触れたものを、私の議論の材料に使うだけである。

三辞書のこの箇所の記述のしかたには、それぞれの特色がある。三省堂国語のは、できるだけ簡明に語義を並列してしまって、慣用句を各項目に所属させている。広辞苑では、項目の並べ方は三省堂の場合と同じようだが、成句が別に立ててある所がちがう。広辞苑でも「日の―」「雲の―」のような簡単な慣用句は項目の中に入れてあるが、古典から例文が引用できるような成句は別にしてある。熟語・連語・慣用句の類を語義の項目に所属させるか、別に立てるかは、国語辞書・外国語辞書の全般を通じて常に問題になることであろう。意味の系統から考えれば、項目へ入れるべきだし、検索の便を考えれば、別にまとめてあった方がよい。岩波国語の記述法は、大いに意味の系統を考えたものらしく、なるべく根本の意味にまでさかのぼって抽象的に本義をとらえ、そこから派生したと思われる意味を下位に列記して、慣用句をそこへ入れている。

この三つの態度のうちで、意味の記述という点から考えて、私

は、岩波国語の態度に、いちばん親しみをもつ。しかし、そこには、また、本義をなるべく少なく括ろうとしたための無理もあるようだ。「足が出る」を「胴から下に分かれ出ている部分」という根本義の中に位置させたのには全く賛成するが、同時にその項目の中に「からだをささえ、また歩くのに使う」という関係のない根本義もしるしてあるのには賛成できない。

三省堂国語のように、十番目の項目に「不足」と簡明に書いてあるのは、確かにわかりやすいにはちがいないが、「足」にどうして「不足」の意味を生じたのかは、これではわからない。本当にわからないことなら、わかるように錯覚させては罪になろうが、わかってもよいことなら、わかるように配列したが親切であろう。

この場合、「不足」というのは現象的な意味であって（それも本当は「不足」よりも「超過」がよい。広辞苑参照。）それは本質的意味の一部である「本体からはみ出た部分」という意味から由来したものと、私は思う。（もし、通時的考証によって、この由来説が違うことがわかれば、この例については、この論は正しくないことになるが、それは本稿の主旨には関係ない。）

岩波国語の記述は、この本質的意味と現象的意味の区別を考慮しているように思われるが、私の考える本質的意味は、もっと元素的なものである。その点で、セマンテック・ディファレンシャルにも通じるものがあるが、あれほどの一般化はしない。

試みに「あし」という語の意味を、私のやり方で、かつ一般辞書の方式にならって記述すれば、次のようになる。

① 人体の胴より下の部分

(1) 腰から下全部、特にももとすね。漢字「脚」を当てる。「あしが長い・短かい」

(2) くるぶしから先端まで。漢字「足」を当てる。「あしが大きい・小さい」「あしの裏」「あしに合う靴」

(3) 脚と足を区別しない全体。「あしで蹴る」

(4) 腰から出て二本あるもの。「あしを広げる・すぼめる」

② 動くもの。動くためのもの。「……の手足となる」「通勤者のあしを奪う」

③ 動き。動くこと。「あしが早い」（走る速度がはやいことが本義で、比喩的に、食物のくさりやすいこと、商品がよく売れることなどにいう。）「雨足が早い」

④ ささえるもの。「あしが丈夫だ」「机・椅子のあし」

⑤ 本体からはみ出たもの。「あしが出る」「あしを出す」（費用が予定のわくを越えること。）

⑥ 地面についているもの。立つ所。「あし場」「あしの踏み場もない」「あしが地についている」「あし元を見すかす」「あし元が明るいうちに帰る」

⑦ ある物事に接触し、密接な関係にあること。「……からあしを洗う」「あしがつく」

⑨ 本体から下に垂れたもの。「えりあし」「雨のあし」

（備考）㈠人間のあしを基本とし、↓動物↓一般物体、のように使用範囲が広がる。㈡「足」と「脚」では連想価がかなり異なる。どちらかといえば「足」は実質的連想をもち、「脚」は審美的連想をもつことが多いようだ。特に若い女性の間では「脚」は全身のスタイルを象徴するらしい。㈢価値観を伴うことも多い。

「足げにする」「足元にも及ばない」など、「下部」の意味をもつときはマイナス価値が多く、「足が地についている」「足元を固める」など、ささえる意味をもつときはプラス価値が多い。

意味記述の方法

語が実際の文脈の中に用いられたのが、各語の権現した姿である。われわれの目に見え、耳に聞こえるのは、すべて権現像だけであり、本尊は、その奥にあるであろうと推定するだけである。だから、語の意味は、たくさんの用例を集めなければ記述できない。意味の記述を正しくするためにも、国立国語研究所が行なっているような大規模な語彙調査が、どうしても必要である。

だが、実際の用例がなければ意味の記述はできないかというと、そうでもないと私は思う。用例は、さがすばかりでなく、作ることもできる。よく、辞書や文法書の用例が作ったものだと言って極力攻撃する人があるけれども、私は作ったものがみないけないとは思わない。作られるべき必然性をもち、作り方の原理に従って作られたものなら、さしつかえないと思う。その、作り方の原理をさぐってみたい。

体言と用言と辞とが、相互にパートナーとして何を求めるかを考えることによって、ある語がある文脈の中に権現した姿を手っ取り早くとらえることができる。例えば「水を流す」は句として一つの意味（状況）を表わしているだけだが、この句に表われた意味の中に、「水」「を」「流す」三語それぞれの意味の実現を見ることができる。「水」は「液体であり」「流せば流れるものである」ことを本体とし、その実現がここにある。「流す」は「液体をかこみや容器の制限から解放して、自然にまかせる」ことを本体とし、その意味が実現している。「を」のことは言うまでもない。その「を」を「に」に変えて「水に流す」というと、「水」の意味の現われ方がちがってくる。この場合の「水」は溝や川を流れて二度と戻って来ないものを意味し、かつ、無色透明で何のくせももたない存在をも意味しているようだ。そうして、この場合の「流す」には、前の場合よりも、流し込む先への意識が働いている。そう思って「流す」の意味を考えると、なるほど、野放図に流す場合もあり、導いて流す場合もあり、「流す」にそれぞれの語感がこもっていることが認められる。また「岩を流す」「家を流す」などの句を作ってみると、「流す」の中に非常な力感がこもる場合があることがわかる。

日本語の辞は、体言と用言とをつなげて、さまざまな意味の様相を現わし出してくれる便利なものである。辞のこの性質を利用して、まず、体言につき用例を作り、各用例の現象的意味から本質的意味をさぐってみる。辞のつけ方を次のように体系化し、各辞の性格により、体言の表わす意味の類型を「層」と名づけてみる。

A、本質層　問題語をXとし、「Xは——。」という文を作る。「——」はなるべく用言一語とする。ここで作られる用例は、辞書や教科書で無理に定義づける場合のほかは、現実の文脈にはほとんど現われない種類のものになる。また、この層の用例は、空には作ることがむずかしい。他層の用例を作ってから、その奥にひそむ意味として、作為的に引き出すものである。論理的には最初に置かれるが、作り方の手順では最後となる。

B　属性層　ある場合、本質層とあまり区別がないが、本質層では汎称的なものを求めるのに対して、属性層は特称的な意味を求める。

(1) 「Xが――。」を作る、位置を逆転すれば「――なX」で連体修飾語になる用言を求める。

(2) 「Xより――。」を作る。形容詞・形容動詞的なものが来る。

(3) 「Xの――。」を作る。体言が来る。

C 交渉層 Xを対象（目的）とする人間その他のものの行為を意味する層。Xに「を」「に」「へ」「で」「と」「から」などの格助詞をつけ、これを受ける動詞を求める。

D 比喩層 Xが何かの象徴として用いられるときの意味の集まり。「Xのような――」の体言、及び「Xのように――」の用言を求める。

E 応用層 「――のX」の「――」に当たる体言を求めると、Xが何かの状態において存在する、現実の姿が見出される。

F 対比層 並列の格助詞「と」を用いて「Xと――」「――とX」のように、Xに対比される概念を求める。

以上六層は助詞を介して用言との関係を作り出すものである。このほかに、別の方法で、次の各層を設定してみる。

G 価値層 形式的な手続きはない。各用例の中から、価値観のいちじるしくこもったものを抜き出して、プラスとマイナスとに分け、価値の質を記述する。

H 結合層 Xが他語と結合して別の語となるとき、他の各層の中のどの意味が生かされるかを記述する。

以下はXを離れてXを考察する。

I 関連層 Xの意味と密接不可分な関係にある意味を表わす他語を系列的にさぐる。これは類義語集となる。

J 潜在層 Xの存在や働きを不可欠条件とする事態、すなわち、Yの中にXが潜在しているようなYを求める。

K 変異層 これは、Xと同根の語X′がある場合に限り、X′の用法を求め、Xの意味に関する情報の補いとする。

例語「みず（水）」による記述

A 本質層

1 水は液体である。
2 水は冷たい。
3 水は色がない。
4 水は透明で、汚れがない。
5 水は味がない。
6 水はにおいがない。
7 水は表面が平らで滑らかである。
8 水はきまった形がなく、どのような形にでもなる。
9 水は表面が物の形を映す。
10 水は生命を支える貴重なものである。
11 水は無限にあり、容易に得られる。
12 水は静かである。
13 水は力をもつ。
14 水は生命を奪う。
15 水は動く。
16 水は動かない。
17 水は低い所へ行く。
18 水は火を消す。
19 水は重みをもつ。
20 水はしめり気を与える。
21 水は汚れを落とす。

前述のように、これら21項目は最初に作ったものではなく、他層の用例から抽象して最後に作ったものである。水という物質の説明であれば、「無色透明無味無臭の液体」というように、いくつかの項目を合わせて言った方がいいが、それを合わせないで、一要素ご

とに独立させた所にものではなくことばの意味の記述たるゆえんがある。また、10と14、15と16のように互いに矛盾した項目もあるが意味の他面性にとっては、それは矛盾でも何でもない。

以下の層の各用例の下に(A1)のように示したのは、その用例が本質層のその番号の項目の意味の権現したものであることを示す。

B 属性層

(1) 水が——する

1 水が流れる(A1 A15 A17)
2 水がよどむ、たまる(A16)〔↓水たまり〕(注)↓は複合語への発展を示す。
3 水が垂れる、したたる(A17)
4 水があふれる(A8)
5 水が漏(洩)る(A8 A17)
6 水が浸みる、にじむ(A8)
7 水が湧く(A11)〔↓湧き水〕
8 水が汚れる(A11 A20)
9 水が澄む(A4)
10 水がにごる(A4)
11 水が出る(A13)〔⬇出水〕(注)⬇は異なる語種の語で作られる相当語を示す。
12 水が引く(A15)

(2) 水より——

1 水より冷たい(A2)
2 水より重い、軽い(A19)
3 水より濃い(A4)〔⇩血は水よりも濃い〕(注)⇩は連語への発展を示す。

(3) 水の——

1 水の面(A7)〔⬇水面、〈変〉みなも〕(注)〈変〉は変異層を示す。
2 水の音(A15)↓水音 ⬇水声
3 水の色(A4)
4 水の勢い(A13 A15)〔⬇水勢〕
5 水の力(A13)〔⬇水力〕
6 水の上、水の中(A1 A7)〔⬇水上、水中〕
7 水の流れ(A15 A17)〔⬇流水〕

このような用例はまだいくらでも作れる。それに従って本質層の項目もふえる、ただし、「水がある」というような例は、確かに作れるが殆んど情報量をもたない。「ある」という動詞は「が」を介してあらゆる名詞を受けとめ得るからである。

C 交渉層

(1) 水を——する

1 水を飲む(A1 A2 A4 A10)〔↓飲み水 ⬇飲料水〕
2 水を汲む、すくう(A1)
3 水をかける(A1 A13)

4 水をかく（A1 A13）〔↓水かき〕
5 水をくぐる（A1 A13）
6 水をかぶる（A1 A20 B6）〔↓水かぶり〕
7 水を切る（A1 A20 B6）〔↓水切り ⇩水切りがいい〕
8 水を含む（A1 A20）〔⬇含水――〕
9 水を流す（B1）〔⬇排水〕
10 水を通す（B1）〔⬇通水〕
11 水を注ぐ（B1）〔⬇注水〕
12 水を引く（B1）〔⇩田に水を引く⇩我が田に水をく⬇我田引水〕
13 水を配る（B1 A10 A17）〔⬇給水、送水、配水―〕
14 水をためる（A16 B2）〔⬇貯水〕
15 水をせく、せき止める（B1 B2）
16 水を浴びる（A1 A4 A13）〔↓水あび〕
17 水を泳ぐ（A8）〔↓水泳ぎ⬇水泳〕
18 水を張る（A16 A7）
19 水をたたえる（A16）
20 水を渡る〔風が水を渡る（A7）、舟が水を渡る（A13）〕
21 水を治める（A10 A13 A14 A15 A16 A17）〔⬇治水〕
22 水を防ぐ（A13 A14 B1）〔⬇水防⇩水防工事〕。（B6）〔⬇防水⇩防水する〕
23 水をさす（A2）
24 水を割る（A5）〔↓水割り〕
25 水を打つ（A1 A13）〔⇩水を打ったように静まりかえる〕
26 水を向ける（A15）

(2) 水に――する
1 水に浮く（A1 A7 A19）
2 水につく、つかる、つける（A1 A20 B6）
3 水にひたる、ひたす（A1 A20 B6）
4 水に濡れる、濡らす（A1 A20 B6）
5 水に溶ける、溶かす（A1）
6 水にもぐる（A1 A13）〔⬇潜水〕
7 水にはいる（A1 A14）〔⬇入水〕
8 水に沈む、沈める（A1 A14）
9 水におぼれる（A14）
10 水にはまる（A14）
11 水に映る、映す（A9）

(3) 水で――する
1 水で洗う（A4 A13 A21）〔↓水洗い⬇水洗〕
2 水で遊ぶ（A1 A8 B1）〔↓水遊び〕
3 水でしめす（A20）

4 水で冷やす(A2)
(4) 水から——する
1 水から上がる、揚げる(A1)〔↓水揚げ〕

D 比喩層

(1) 水のような——
1 水のような酒(A5)
(2) 水のように——
1 水のように冷たい(A2)
2 水のように冷静な、落着いた(A2 A12 A16)
3 水のように静かな(A12)
4 水のように澄んだ(A4)

E 応用層 ——の水

1 〔天然の空間的状態〕川(池、沼、湖、海など…)の水
2 〔天然の時間的状態〕春の水〔⬇春水〕秋の水〔⬇秋水⇩三尺の秋水〕
3 〔容器中の状態〕瓶(コップ、びん…)の水
4 〔特定用途下の状態〕酔いざめの水、末期の水、手向けの水

F 対比層

1 水と油(C5)
2 水と火〔水火も辞せず A14〕
3 火と水〔たとえ火の中水の中 A14〕
4 血と水〔血は水よりも濃い A2 A3 A4 A5 A6〕
5 湯と水〔湯水のように使う A11〕

ここにあげたものは1のほかは、このように「XとY」形で用いることはなく、〔 〕内の慣用句で用いられるのを便宜上こう示した。

G 価値層

(1) プラス価値
1 〔生命をささえるもの〕潜在層の「うるおい」「しめり」結合層の「みずみずしい」など。(A10 A20)
2 〔汚れを洗い落とすもの〕潜在層の「すすぐ」(A4 A13 A21)
3 〔美しいもの〕結合層の「玉水」(A4)
4 〔神聖・厳粛なもの〕若水(A4 A21)、死に水(A21)
(2) マイナス価値
1 〔溺れさす〕入水、身投げ、水責め、水攻め(A14)
2 〔ぐじゃぐじゃにする〕水びたし、水につく、しめっぽい、湿気る(A20)
3 〔冷えさせる〕水をさす(A2)
4 〔味をなくす〕水くさい、水を割る、水っぽい(A5)

H 結合層

(1) 和語との結合
1 〔水+名詞〕水音(B1)、水気(A20)、水煙(A8 A15)、水玉(A8)、水虫(A20)、水心〔a水泳の心得(A1)b魚心あれば水心(A1)〕、水車(A13)、水田(A10)、水瓶(A8)、水鏡(A7)、
2 〔水+動詞〕水割り(A5)、水洗い(A4 A13)、水盛り(A7)、水揚げ〔a↓水揚げ量(A1)、b水揚げ料(?)、c↓水揚げがいい(A20)〕

水保ち〔がいい〕(A20)、水切り〔がいい〕(A20)、水はけ〔がいい〕(B1)、水じまい〔がいい〕(B1)、水たまり(A6 B2)、水争い(A10)

3 〔名詞＋水〕 玉水(A4)、池水(A7 A16)、雨水(A10 A11)、塩水(A1)

4 〔動詞＋水〕 湧き水(A10 A11 A13)、飲み水(A10)、呼び水・迎え水・さそい水(A15)、死に水(A21)、逃げ水(A15)、引き水〔をする〕(A15)、もらい水〔をする〕(A10)、打ち水〔をする〕(A13 A20)

5 〔形容詞＋水〕 若水(A21)、大水〔⬇洪水〕

6 〔畳語〕 みずみずしい(A10 A20)

7 〔水＋接尾語〕 水っぽい(A5)、水くさい(A5)

(2) 漢語との結合

1 〔水＋名詞〕 水芸(A4 A15)、水牢(A2 A14)、水商売(A5 A8 A11)、水鉄砲(A13 C(3)2)、水行政(A10 C(1)21)、水資源(A10)

I 関連層

1 集合状態 〈静的〉潦、池、沼、沢、淵、湖、海、水たまり、たまり 〈動的〉川、河、瀬、流れ、海

2 微小状態 露、霧

3 落下状態 雨、滝、水滴、したたり

4 自然環境状態 浦、浜、潟、入江、湾、津、磯、洲、岸、崎、岬、島、汀、渚、ほとり

5 建造環境状態 溝、渠、水路、運河、水道、疏水、港、プール、クリーク、インクライン

6 生体発生状態 涙、唾、涎、汗、尿

7 人造物状態 汁、液、酒、ジュース

J 潜在層

1 〈静〉たまる、淀む、たたえる

2 〈動〉流れる、漂う、滴る、垂れる、湧く、波、うねり

3 〈音〉せせらぎ

4 〈水気のある状態〉うるおう、しめる、湿気る、しめっぽい

5 〈水に関する行為〉飲む、注ぐ、すすぐ、くぐる、もぐる

6 〈水に対する行為〉身投げ

K 変異層 「み」に関する情報

みお〔→みおつくし〕、みくまり、みなわ、みなれさお、みなと、みなもと、みなかみ、みなも、みなそこ、みなまた、いずみ

結び

右のサンプルは至って不完全なものだが、名詞の意味を一つの構造模型として記述する試みの一例として示した。基本語といわれるような数百程度の語について、このような記述をしてみたら、意味の記述という学問的目的のほかに、用法を知るための実用辞書として、ことのほか役立つものになると信ずる。

私のこの考えが時枝先生のお考えにつながるものかどうか、危ぶまれるが、私は、言語をダイナミックな現象としてとらえることを先生から教わったつもりである。ことばの意味をダイナミックな展開の姿でとらえようと意図するこの小論を、先生の霊前にささげることを、私は恥としない。

——国立国語研究所第四研究部長——